

関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター



CONTENTS

- 文化交渉学拠点 (ICIS) リーダー 巻頭言
 - 銭謙益と「日中交渉」—
- 泊園書院開設200周年記念行事の開催
- ローマ大学及びバチカン図書館等における研究活動
- 文化交渉学拠点 (ICIS) 国際シンポジウム
 - 仏教交流と東アジア—

文化交渉学拠点 (ICIS) リーダー 巻頭言

— 銭謙益と「日中交渉」—

筆者は現在、中国・明末清初の詩人、銭謙益 (1582-1664) が日本でどのように受容されたのかについて調べている。銭謙益『牧齋初学集詩注』『牧齋有学集詩注』が明治16年 (1883) に日本で木活字本が出版されているが、これは明治期日本における清詩尊重の風潮が関係している。ただし、銭謙益の著作が清・乾隆帝の時代に禁書となったこともあり、江戸期日本では銭の文学は受容されてはいないものと筆者は思い込んでいた。

ところが、大庭脩「内閣文庫の購来書籍目録」(1968) に「初有学集箋」とあり、これは銭謙益の詩に族孫の銭曾が注をつけた『牧齋初学集詩注』『牧齋有学集詩注』両書に違いない。同目録は天保・弘化年間の船の持渡書の目録であるから江戸末期にこの両書が日本に伝来していたのであった。これは筆者にとって大きな発見であった。内閣文庫は現在もこの両書を蔵しているが「昌平坂学問所」「浅草文庫」の印が押されている。天保・弘化年間に舶来した、この「初有学集箋」は、おそらく昌平坂学問所に帰したのであろう。

ところで、禁書となった銭謙益の著書であるが、清の支配力が衰えた二十世紀初には中国でも再編集されて刊行が始まる。

ただ、禁書としてそのほとんどが焼却された銭の著作を再び探し求めるのは大きな困難が伴った。編集者は明治日本にまで銭謙益の著書を探し求めたという (巖志雄「銭謙益遺著於清代的出版及“典律化”歷程」による)。中国から日本に伝来した銭の著作は、清末民国初には中国に戻ったのである。これこそ日中間の文化交渉の一事例と言えよう。

大庭脩「内閣文庫の購来書籍目録」は本学東西学術研究所の紀要第1輯に載せられる、貴重な史料の紹介である。そしてまた大庭先生は「日中交渉」ということばを多く使われた。ただ「日中交渉」という以上、“中国から日本へ”だけでなく“日本から中国へ”という要素も含まれるべきである。今回紹介した、銭謙益「初有学集箋」の受容過程はまさしく「日中交渉」そのものであり、それを大庭先生の著作によって知ることができた。「文化交渉学研究拠点」の一員である筆者は大変強い感動を覚えた次第である。

(関西大学東西学術研究所
文化交渉学研究拠点リーダー
長谷部 剛)

泊園書院開設200周年記念行事の開催

昨年10月、泊園書院開設200周年行事として「記念シンポジウム」と「特別展示」を開催した。

この記念行事は関西大学泊園記念会と東西学術研究所が主催、本学校友会・本学教育後援会・文学部の共催により大きな反響を呼んだ。以下、これらにつき紹介する。

1 泊園書院とは

江戸後期の文政8年（1825）大阪に開かれた私塾、泊園書院は昨年二百周年を迎えた。

同書院は藤澤東咳、南岳、黄鵠、黄坡の四人の院主、および石濱純太郎によって維持、発展し、昭和23年（1948）まで続いた。特に幕末以降は懷徳堂や適塾をしのぐ規模を有し、近代化の黎明期である明治中頃に至るまで「大阪ナンバーワンの学問所」として全国から学生を集めた。

また黄坡が本学最初の名誉教授となり、石濱が文学部教授として活躍、さらに泊園文庫が本学に寄贈されて東西学術研究所が創設されるなど、「関西大学の知的ルーツ」としても知られる。



記念行事ポスター（表）



記念行事ポスター（裏）

2 シンポジウムの開催——1日目

ビデオと講演

まず10月24日（金）と25日（土）の2日間、いずれも午後1時から5時まで、梅田キャンパス8階大ホール“KANDAI Me RISEホール”においてシンポジウム「泊園書院から関西大学のルーツをひもとく」を開催した。第65回泊園記念講座を兼ねる集まりでもあった。

1日目は長谷部剛泊園記念会副会長の司会のもと、まず高橋智幸学長、二井ひろみ校友会副会長、野澤友秀教育後援会会長に挨拶を賜った。

ついでビデオ「大阪ナンバーワンの学問所 泊園書院」を上映、120余年にわたる同書院の歩みを紹介した。本学出身の作家、林家染太師匠のユーモアあふれる語り、株式会社・読売連合広告社の撮影による22分間の映像は、「想像していたよりずっと良かった!」と大好評を頂戴した。半年ほど時間をかけて制作したビデオであり、苦勞のしがいがあったというものである。

後半では東京大学大学院総合文化研究科准教授の高山大毅先

生の講演「徂徠研究の大先達——泊園書院と徂徠学」、関西大学東西学術研究所・非常勤研究員の山寺美紀子先生による「帰去来辞」など三曲の古琴演奏がなされ、いずれも魅力的な内容であった。

対談と銘菓「南岳」

ついで泊園記念会名誉会長・本学名誉教授の藪田貫先生と高山先生の対談「大阪の私塾がはぐくんだ知の力——泊園書院の学びとは」を吾妻の司会のもとに実施、大阪の学問・文化のあり方や泊園書院の特色つき新たな知見が示され、質疑応答もなされた。

なお、受付では来場者に銘菓「南岳」を進呈した。これは東咳・南岳の故郷である香川県高松市の熱心な泊園ファンの方の尽力により作られたお菓子で、これまた「古風な和菓子の味がおいしい」と評判になった。包み紙の由緒書は吾妻が書かせていただいた。

3 シンポジウムの開催——2日目

2日目は7名の研究者による研究発表がなされた。

第1部

橋本昭典先生（奈良教育大学教育学部教授）

「教育勅語」の漢訳とその思想的文脈

—藤澤南岳、そして重野安繹—

榎木 亨先生（浙江外国语学院東方語言文化学院講師）

藤澤東咳「楊雄從王莽論」について

松井真希子先生（奈良工業高等専門学校准教授）

田中右馬三郎『大阪繁昌詩』とその周辺

増田周子先生（関西大学文学部教授）

藤澤恒夫の文学活動

—俳句・川柳を中心として

第2部

佐賀香織先生（法政大学大学院政策科学研究科特任研究員）

藤澤南岳と宇和島出身者との交流について

田山泰三先生（香川県英明高等学校講師）

讃岐における泊園関係者顕彰の現状

太田 剛先生（四国大学文学部教授）

香川で収集された藤澤家の書蹟

—花待草舎コレクション—

いずれも各分野の専門家による発表で、従来知られていなかった泊園書院の研究成果を披露していただいた。

4 特別展示の開催

特別展示は10月20日（月）から11月15日（土）まで、総合図書館1階展示室で行われた。

泊園書院に関する関連写真・パネルのほか、泊園書院の大阪における祖である菅甘谷の書、東咳・南岳・黄鵠の書軸や巻物、南岳らの著作、近年の関連出版物などを展示した。絵画としては富岡鉄斎が南岳の還暦を祝って贈った泰山図、また、石濱が内藤湖南に師事していた関係から内藤文庫蔵の絵画2点も掲げた。

他に泊園書院関係の収蔵品として印章（篆刻）230点がある。南岳らが所持していた日本近代を代表する印章コレクションで、今回それらをすべて保管するための桐箱専用ケースを作成し、

その一部を展示した。詳細な展覧目録も作成したので、ぜひ参考にさせていただきたい。

なお、ビデオ「大阪ナンパーワンの学問所 泊園書院」はWEB泊園のトップページからご覧いただけます。



特別展示展覧目録 表紙

（近世近代大阪の漢学・芸術研究班 客員研究員
関西大学名誉教授・泊園記念会会長 吾妻 重二）

ローマ大学及びバチカン図書館等における研究活動

2025年9月、ローマ大学とカサナテンセ図書館、バチカン図書館を訪れた。

ローマ大学では、イタリア現存漢語資料シンポジウムと院生フォーラムに参加した。イタリア現存漢語資料シンポジウムは、内田慶市名誉教授が研究代表者の科研に関連するシンポジウムであり、ローマ大学の研究分担者とともに研究発表を行った。院生フォーラムはローマ大学東方学院、本学東アジア文化研究科と文学研究科の在学生に加え、東アジア文化研究科の卒業生、廈門大学中文系の大学院生も参加した。ローマ大学の先生方から、一人ひとりの学生の発表に対して質問やアドバイスをいただいたことは、学生にとって貴重な経験となっただけでなく、私にとっても教員として学ぶところが多かった。



展覧会“EN ROUTE”の展示が施されたバチカン図書館エントランス

カサナテンセ図書館では、雍正帝の時代のキリスト教档案資料が含まれる文献を閲覧したかったのだが、保存状態が良くないことから見せてもらうことができなかった。数年前までは閲覧可能だったようなので、今後修復され閲覧可能となることを期待したい。

バチカン図書館では、童蒙書を中心とした漢籍の注釈の調査を行った。文語で書かれた童蒙書に対する注釈は文語で書かれたものが多いようだが、文語に遅れて口語体で書かれるようになった。先行研究を見るかぎり中国や日本での口語体注釈付童蒙書の所蔵についての報告はまだない。フランス国立図書館とバチカン図書館にはそれぞれ同一の童蒙書に対する口語体注釈書が所蔵されているが、異なる版本であり、共に口語体ではあるが異なる注である。今後もそれぞれについて詳細に調査していき、口語体注釈が書かれた背景や、文体の変遷を考えたい。また、『玉嬌梨』の写本資料を閲覧した。この資料は、『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目録』（（法）伯希和編（日）高田時雄校訂補遺 郭可訳、中華書局 2006年）の「Vat.estr-or 13」には「中國新聞」と記載される資料群に含まれている。

（東アジア言語資料研究班 主幹 奥村佳代子）

文化交渉学拠点（ICIS）国際シンポジウム —仏教交流と東アジア—

2026年7月10日、「仏教交流と東アジア」のテーマでシンポジウムを開催した。李志鴻氏（台湾大学社会科学院博士後期研究員）は、「聖物的政治学：七至八世紀東亞佛教王権の物質建構與政教論述」の論題で報告し、蓮・樹・草といった仏教に関わる植物に注目して、こうした植物が王権や仏法を象徴するものとしてどのように表現されていくかを考察した。隋文帝の時代には、仏舎利の頒布とともに草木の瑞兆に関連して説明づけ

られ、唐の武則天の時期には常態化・制度化するとし、日本の飛鳥から奈良時代には、このような思想が日本社会に適合的に書き換えられたとする。瑞祥を発するものが、隋唐では天であったが日本古代では三宝や天地



神祇になるという指摘は興味深い。

劉家幸氏（成功大学全校不分系准教授）は、「小倉城の異国僧―即非如一の豊州紀行について―」の報告を行い、17世紀に来日した黄檗僧即非が豊前小倉に滞在した時の詩文集『豊州艸』を分析した。即非は、藩主小笠原氏の帰依を受け福聚寺を当地に開き住持となる。即非が見た小倉城下の景観をはじめ福聚寺の様相を紹介した。

各報告について曾昭駿氏（浙江工商大学専任講師）、原田正俊（本学教授）からコメントと質問が出され、その後研究班メンバーと一般参加者、大学院生も含め議論が交わされた。東アジアにおける仏教を媒介とした文化交渉については論点が多様にあることを知ることができ有意義な成果を共有することができた。

（王権・秩序とアジアの宗教研究班 主幹 原田正俊）



李先生



劉先生

図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所資料集刊29-4-2

藤澤南岳日記 二 泊園書院資料集成 四-二

吾妻 重二 編著 出版社：関西大学出版部

B 5 判上製／406頁／定価 9,350円（本体8,500円＋税）

ISBN 978-4-87354-817-3／分類コード C3095／刊行年月 2026年3月

大阪文壇の中心・藤澤南岳の日記を影印、翻刻する

幕末に懷徳堂や適塾をしのぐ大私塾となった泊園書院は明治時代、稀代の学者藤澤南岳によりいよいよ隆盛、大阪ナンバーワンの学問所となって子の黄鵠と黄坡に引き継がれる。丁寧に書き残された南岳の漢文日記は同書院の歩みを如実に伝えている。第二冊は明治14年から27年までを収める。



■ 関西大学東西学術研究所資料集刊29-4-3

藤澤南岳日記 三 泊園書院資料集成 四-三

吾妻 重二 編著 出版社：関西大学出版部

B 5 判上製／282頁／定価 7,700円（本体7,000円＋税）

ISBN 978-4-87354-818-0／分類コード C3095／刊行年月 2026年3月

大阪文壇の中心・藤澤南岳の日記を影印、翻刻する

泊園書院の塾生たちは幕末維新・明治大正時代、日本の近代化に大きく貢献する。また豊かな文芸の力を持つ南岳のもとには多くの文人が集まり、漢詩や書画のサロンが形成された。当日記には大阪の時相と学芸が活写される。天皇陵巡礼の先駆的記録も貴重である。第三冊は明治27年末から31年までを収める。



編集後記

関西大学文化交渉学研究拠点ニューズレターNo.12をお届けする。前号同欄で紹介した、大阪豊中の漢学者、小畑萬次郎（松坡）には七男二女の子があった。長男、治良（松雲）は家業の農業を継ぎ、次男、三男は師範学校に進み教職に就き地元に残った。四男は米留学ののち外務省、五男と六男は職業軍人に、七男は東大卒業後住友に入った。農家の小畑家は豊かではなく、次男、三男が師範学校に進んだのも現金収入を得て家を支えるためであったこと、七男は自分だけ高い教育を受けられたことに終生、感謝を忘れなかったこと、そして長男は自ら「捨て石」となって家を守ったこと、などを小畑家の人々へのインタビューから知った。近代化のなかで漢学者の家族がどのような生き方を選択したのか、について考える好例である。（長谷部 剛）

表紙上掲載写真：

【右上】泊園書院の正面玄関 【左下】かつての泊園書院 【中上】泊園書院跡の碑（大阪市中央区淡路町） 【中下】泊園書院址の碑（関西大学以文館北側）



発行：関西大学文化交渉学研究拠点

(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL：06-6368-0653 FAX：06-6339-7721

E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp

URL www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2026年（令和8年）9月